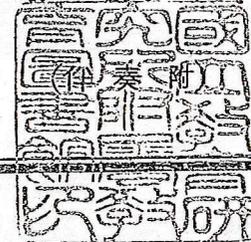


唱歌教科書



不思議を探りて歸るかひばり
あれ〜見るまに向ひの丘なる
茂る小藪に見えずなれど

あはれ聲のみ空に聞ゆ
さく〜語れや天の不思議。

○落 花

ひらひら ひらと 散るよ

いづこにゆくらん さくら花

語らず いはず

流れに うかびて

ゆかか。

○幸ある國 大 齋 珠 瑛

一、かざせ、かざせ、輝やく日の旗、

樹てよ〜輝やく日の旗、

心一つに力協せて 汚すな日の旗旭の旗、

護れや日の旗旭の旗、

見よ〜 旭の旗、汚すな日の旗

旭の旗、 護れや日の旗旭の旗、

二、愛でよ〜 み山の櫻を、

慕へ〜深山の櫻を、

大和心の花と匂へり學べよみ山の櫻の花、

讀へよみ山の櫻の花、

見よ〜 櫻の花、學べよみ山の櫻の花、

花、 讀へよみ山の櫻の花。

三、仰げ〜秀づる富士の嶺、

見よ〜秀づる富士の嶺、

比ひ又無き清き姿ぞ、崇高き心を

共に學べ、清けき姿を共に習へ、

見よ〜富士の高嶺、け高き心を

共に學べ、 清けき姿を共に習へ。

○谷間の一つ家 八 波 田 吉

一、しのめのの やぶか

みそささい 鳴くよ

お背所のはねつるへかさこそとごうく

谷間の一つ家。

二、たそがれの さかみち

ふるぎつね 鳴くよ

お母屋のつりランプ ほそぼそとともる

谷間の一つ家。

○田 植 大 齋 珠 瑛

一、新緑の若葉の茂れる郷には

田植の管笠涼しき歌聲

裳裾をぬらすも御國のみ爲ぞ

歌ひて植えよや節日も正しく。

二、父母兄弟もろごも歌ひて

嬉しく楽しく植えたる玉苗

豊けきみのりを今より見するか

葉毎に宿せる夜露の白玉。

一、美はしきかな春はふけて

野にも山にもこゆき緑の

日増し色ます五月の日は

若き我等の胸もをどる

若き我等の胸もをどる。

二、かのほこすぎのみ空さして

若きいのちの伸び行くまに

のぞみ燃ゆる五月の日は

若き我等の胸もおどる

若き我等の胸もをどる。

○湖上の月 大 齋 珠 瑛

一、浮べし小舟の棹をおきて

船た〜き歌うたへば

共聲遙けく空にひゞき

雲居の月にも通ひゆかん。

躍れる小魚のかけも見えて

鏡と見する湖の面に

黄金の波を千々に砕く。

二、又なき良夜と笛をさりと

好める曲調月にふけば

共音は清けく四方にひびき

岸への村にも通ひ行かん

操つる水棹の雫おちて

鏡と見する湖の面に

白玉眞玉千々に砕く。

○夏の黄昏 山 崎 紫 泉

一、青葉若葉の 風そよぐ

小川の堤にさまよへば

ゆかしき香 ホロ〜と

夕やみもれてながれ来る。

二、かすけきみ空の星かげに

螢のかがり火うつろひて

笑ふや やさし 卵の花の

香るやゆかし夏のよひ。

○夏の夜 太 一

一、なはてそひて 風は吹き

青葉しげり 香りみつ

仰ぐはるか 色もこく

瑠璃のみ空 雲はたへ

空にみつる 星はみな

きららきらら ひかるなり

涼しき夜夏は来ぬ たのしき短夜や

夜あそぶ夏は来ぬ たのしめ夏の夜

二、水はみちて 川に田に

うたふ蛙 ふしもよし

雲井の夜に なきてとぶ

聲もゆかし ほと〜さす

たびのやどに 夢をたち

ほと〜た〜く くひなどり

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月十三日發行

定價金壹圓參拾錢

不許
複製

編纂者

若狹萬次郎

發行兼
印刷者

東京市小石川區八千代町四十二番地
若狹萬次郎

東京市小石川區八千代町四十二番地

發行所

交響社出版部